

朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉

— 靑島遺跡・原ノ辻遺跡出土事例を中心に —

石丸 あゆみ

要旨 本稿では、最近増加した資料を含め弥生系土器が出土した遺跡のうち、弥生系土器の資料数が多く様相がそれぞれ異なる4遺跡と、朝鮮半島と日本列島を結ぶ交渉ルート上に位置し、拠点的な役割を果たしていたと考えられる原ノ辻遺跡の出土土器を比較検討することで、当時の日韓交渉の復元を試みた。弥生系土器の様相からⅠ期：城ノ越式から須玖Ⅰ式古段階、Ⅱ期：須玖Ⅰ式新段階から須玖Ⅱ式の2段階に区分し分析を行った。その結果、Ⅰ期は、弥生時代前期後半に交易の中継地として開始された原ノ辻遺跡と、朝鮮半島南部の金海地域を中心とした各地域との短期間の居住を伴う小規模な交渉が行われた時期、また靑島の集落もこの時期に朝鮮半島側の交易拠点として開始されたが、この時点では複数存在する拠点の一つであるということが明らかとなった。Ⅱ期は、前漢の武帝による楽浪郡を含む4郡の設置以後に活発化した交易に、北部九州沿岸域を中心とした西日本の各地域の集団が積極的に関与するようになったため、原ノ辻が交易の拠点として発展を見せ、環濠集落が成立する時期である。靑島においてもこの時期が最も多くの弥生土器がもたらされる時期であり、原ノ辻の弥生土器と強い関連を読み取ることができるため、原ノ辻と靑島の間に集約された交渉ルートが確立されたと考えられる。

1. はじめに

朝鮮半島の遺跡での、弥生土器や一部に弥生土器の要素を持つ土器（以後、弥生系土器¹⁾との名称を使用する）の出土事例は、近年の発掘調査増加に伴いますます増加している。最近の報告として、金海 亀山洞遺跡出土弥生系土器の武末純一氏による報告（武末 2010）、靑島遺跡 B 地区出土弥生系土器の報告（李・石丸 2010）などがあり、いずれもまとまった数量である。弥生系土器研究が本格化した 1980 年代に比べ劇的に資料が蓄積され、2011 年現在ではその数は数百点に達し、弥生系土器が確認された遺跡も約 20 遺跡に及ぶ。

その中でも靑島遺跡では、他の遺跡を圧倒する資料数の弥生系土器が長期間にわたって出土することが知られる。弥生系土器以外にも、楽浪系遺物や鉄器とその関連遺構なども出土することから、朝鮮半島における対外交易の拠点として注目を受けてきた。一方、日本列島において朝鮮半島系や楽浪系の外来系遺物が多数出土し、列島側の交易拠点と考えられているのは、壱岐の原の辻遺跡であり、両地域の交易拠点として注目を受けてきた。

本稿では、最近新たに報告された資料を含めた朝鮮半島出土の弥生系土器を整理し、これまで行われてこなかった原の辻出土弥生土器との比較により、朝鮮半島各地域、特に靑島と原の辻の関係性を明らかにしたい。そこからそれぞれの開始時期と交易拠点への発展、交渉ルートの確立といっ

た当時の日韓交渉の一端を復元することを目的とする。

2. 研究史と問題点の抽出

朝鮮半島出土弥生系土器研究 弥生系土器研究により日韓交渉を復元するために、まず弥生系土器は日本のどの地域からもたらされたのかということをはっきりさせる必要がある。古くは池内洞遺跡の甕棺墓に副葬された袋状口縁壺が、九州西北地域の特徴を持つという指摘（沈 1982）があり、弥生系土器の多くが北部九州の玄界灘沿岸地域の弥生土器と類似することが知られてきた。北部九州の沿岸地域以外に故地を持つと考えられる資料も報告され、温泉洞遺跡出土の壺が熊本県域のものと同様という指摘（申 1984）や、靉島遺跡出土壺から九州以外の地域からもたらされた土器の存在も指摘される（沈・中園 1997）など、いくつかの見解が示されてきた。この他、北部九州の以西地域以外を故地とする資料として、口縁端部を跳ね上げる甕などの以東地域の特徴を持つもの、口縁部が内湾し熊本県域に分布する黒髪式と同様²⁾、山陰地方で見られる壺等が靉島遺跡から複数報告されている（武末 2006, 李・石丸 2010）。

西日本の各地域より弥生土器がもたらされたことが明らかとなっているが、主体となるのは玄界灘沿岸地域を中心とする西北九州を故地に持つ弥生系土器である。平美典氏は、北部九州内のどの地域から搬入されたかを検討するため、北部九州の弥生土器を突帯の有無・位置や口縁部の形態・サイズから器種を細別し、地域的特徴を抽出し、それを基に朝鮮半島出土弥生系土器の故地を検討した。その結果、鋤先口縁で口縁下に突帯を持つ甕に関しては遠賀川以西地域の中でも佐賀以西～多久・糸島地域に見られる特徴を有する資料の存在を指摘し、袋状口縁壺と鋤先口縁の広口壺に関しても糸島地域の特徴を有している資料があるとの見解を示した（平 2001）。

朝鮮半島出土弥生系土器研究の上でもう一つ留意しなければならないのは、擬弥生土器の存在である。擬弥生土器とは、日本における擬朝鮮系無文土器の定義（片岡 1990）と同様、「明らかに本来の弥生土器と異なった土器で、弥生土器の技術的影響を受けて作られた」土器である（平 2001）。靉島遺跡出土資料の他（釜山大博物館 1989）、福泉洞 萊城遺跡の壺（釜山市立博物館 1990）、金海 大成洞焼成遺跡（釜慶大博物館）等多くの遺跡で報告されてきた。擬弥生土器の代表的な研究として、中園聡氏の、靉島遺跡出土資料における無文土器製作者と弥生土器製作者の手による折衷土器の分析（中園 1993）や、武末純一氏が靉島遺跡 A 地区と金海 龜山洞遺跡出土の弥生系土器を、弥生土器：搬入品もしくは忠実模倣品、a: 弥生土器に極めて近いが一部無文土器の要素が見えるもの、b: 無文土器に近いが一部弥生土器の要素が見えるものとした分類（武末 2006, 2010）がある。個々の資料の形態や製作技法を観察し、搬入品もしくは忠実模倣品と擬弥生土器と分類することで、遺跡ごとに異なる弥生系土器の様相が明らかとなり、そこから朝鮮半島内での弥生系土器の展開や半島の土器文化との関係を読み取ろうとする研究が行われてきた。

朝鮮半島出土の弥生系土器の研究が進むにつれ、九州や山陰地方一部から出土する朝鮮半島系土

器との時期的・数量的分布のずれがあることが明らかとなった。北部九州の沿岸域を中心とした地域から、朝鮮半島の土器である断面円形粘土帯土器が弥生時代前期の集落からまとまって出土するのに比べ、朝鮮半島内の遺跡から出土した弥生時代前期段階の土器は、今のところほんの数点が確認されているのみである。また、円形粘土帯土器に続く断面三角形粘土帯土器の日本における分布は、円形粘土帯土器とは大きく異なり、資料数も圧倒的に少なくなる一方で、朝鮮半島へは、弥生時代中期段階の土器が多く搬入されるようになる。

原の辻遺跡出土半島系土器研究 弥生時代前期後半から後期、続く古墳時代前期にかけて継続的に営まれ、円形粘土帯土器・三角形粘土帯土器・瓦質土器・三韓土器・楽浪土器が搬入される長崎県壱岐の原の辻遺跡は、日韓交渉を復元する上で最も重要な遺跡のひとつである。原ノ辻遺跡出土朝鮮半島系土器の研究は片岡宏二氏の業績が大きく、氏は朝鮮半島系無文土器を、後期前半（円形粘土帯土器期）をⅠ期、後期後半（三角形粘土帯土器期）をⅡ期と2段階に分類し、それぞれの弥生土器から受けた影響に従ってⅠからⅢ類に、さらにⅢ類をa～cに細分化し、検討により原ノ辻遺跡が交渉の仲介者としての役割を果たし、常に朝鮮半島の影響を受けていたという見解を示した（片岡 1997,1999）。

白井克也氏は、無文土器・三韓土器・楽浪土器の朝鮮半島系土器の分布をまとめ、朝鮮半島の政治的な情勢を考慮したうえで時期ごとの日韓交渉についての見解を述べている。それによると、(1) 弥生時代前期末から中期初頭にかけての時期に朝鮮半島の政治変動にともなって韓人が北部九州に渡来・移住し、西日本各地に青銅器・鉄器をもたらし(2) 中期前半には朝鮮半島の情勢が安定し韓人の渡来が鈍化したため、倭人の側からの摂家極的な交易の展開により、氏が勒島貿易と呼ぶ勒島遺跡を交易拠点とする交易が盛んにおこなわれた。(3) 弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式古段階までには、勒島遺跡は交易拠点としての機能を終え、代わりに原ノ辻遺跡を拠点とし倭人・韓人が交易に従事する原ノ辻貿易が行われたということである。また、中期末から後期前半には原ノ辻に三韓土器・楽浪土器が流入し、鉄器をめぐり楽浪・韓・倭での交易が原の辻を拠点とした交易が活発に行われると考えられている（白井 2001）。

朝鮮半島出土の弥生系土器研究と、それに先駆けて進められてきた日本列島出土の朝鮮半島系土器研究により、様々な角度から日韓交渉像の復元が試みられてきたが、最近の韓国での弥生系土器資料の増加により従来の認識とは異なる事実も明らかとなっている。例えば、2001年まで3年にわたって行われた勒島遺跡の発掘調査では、多数の弥生系土器が新たに確認され、その主体となるのは搬入または忠実模倣品の須玖Ⅰ式新段階から須玖Ⅱ式であり、調査以前に主体となると考えられてきた須玖Ⅰ式段階という従来の認識とは異なることが明らかとなった。ごく僅かではあるが後期初頭の資料も確認されている。勒島遺跡以外でも、まとまった量の弥生系土器の出土が多く報告された遺跡や、当時の交易を復元する上で重要な遺構・遺物が検出された遺跡が数多くある。そのような遺跡のひとつには、鉄鉾石鉾山上に位置する蔚山 達川遺跡があり、同遺跡出土の壺は須玖

Ⅱ式³⁾の北部九州からの搬入品で、鉄器生産に直接関係する遺跡から弥生系土器が出土した意味は大きい。

このように、最近までの新たな報告により増加した資料を含め弥生系土器資料を型式やその故地を改めて整理した上で、日本列島各地との交渉の復元を行わなければならない。また、これまで行われてきた個々の資料の観察による研究に加え、飛躍的に増加した資料を基にした統計的な研究も必要である。

以上のことから本稿では、最近までの研究成果と、靉島遺跡出土弥生系土器資料を整理したうえで、原の辻遺跡出の弥生土器との比較を行うこととする。その結果、日本列島から朝鮮半島へという一方的な動向のみではあるが、当時の日韓交渉の一端を明らかにしていきたい。

3. 研究方法

図1は主要な半島内弥生系土器出土の分布である。また、表1では弥生系土器の中で、列島からの搬入品または搬入品と形態的にも製作技術の面において、区別することの困難な忠実模倣品をA類、擬弥生土器をB類と設定し、各遺跡の弥生系土器様相について詳しく記した。これらを見ると、①B類はほとんど城ノ越式から須玖Ⅰ式に限られ、金海地域での集中を除けば、沿岸部や島嶼部の遺跡から散発的に出土していること、②須玖Ⅱ式と判断された資料のうち、A類がほとんどで、墳墓への副葬や鉄鉱石採掘遺跡で出土するなど、一般集落以外での出土も目立つこと、③城ノ越式から須玖Ⅱ式、さらには後期初頭の型式である高三瀦式という長期間にわたる型式の土器が出土したのは靉島遺跡が唯一であることなどが分かる。さらに、個々の弥生系土器を観察すると、須玖Ⅰ式と判断された資料の中、より古い特徴を持つものにB類が多く見られ、新しい様相の資料にはA類が多い。これらの事実から判断すると、須玖Ⅰ式段階の土器が多く存在したある時点で半島内弥生土器様相に変化をもたらす画期があったと考えることができる。

よって、城ノ越式～須玖Ⅰ式古段階の時期をⅠ期、須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式までの時期をⅡ期と設定した。この時期区分のもと、靉島遺跡の他に、同遺跡出土弥生系土器の特徴を明らかにするため、出土資料が多く、それぞれ異なった性格を持つ金海亀山遺跡・金海大成洞焼成遺跡・福泉洞菜城遺跡を対象遺跡とした。同様にⅠ期・Ⅱ期に区分した原の辻遺跡出土弥生土器との比較により、画期を挟みⅠ期とⅡ期の弥生系土器様相にはどのような相違があるのか、Ⅰ期・Ⅱ期に継続して営まれた靉島遺跡においてはどのような様相を見せるのかということを明らかにしたい。なお、弥生時代前期及び後期の型式の資料に関しては、その数がわずかであるため分析対象としては扱わず、後の考察で言及することとする。

弥生系土器の器種組成と割合を図2で示した。靉島遺跡と亀山洞遺跡では甕形・壺形土器の他にも蓋や器台といった器種も若干含まれるが、大成洞焼成遺跡・菜城遺跡では甕形土器と壺形土器

朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉

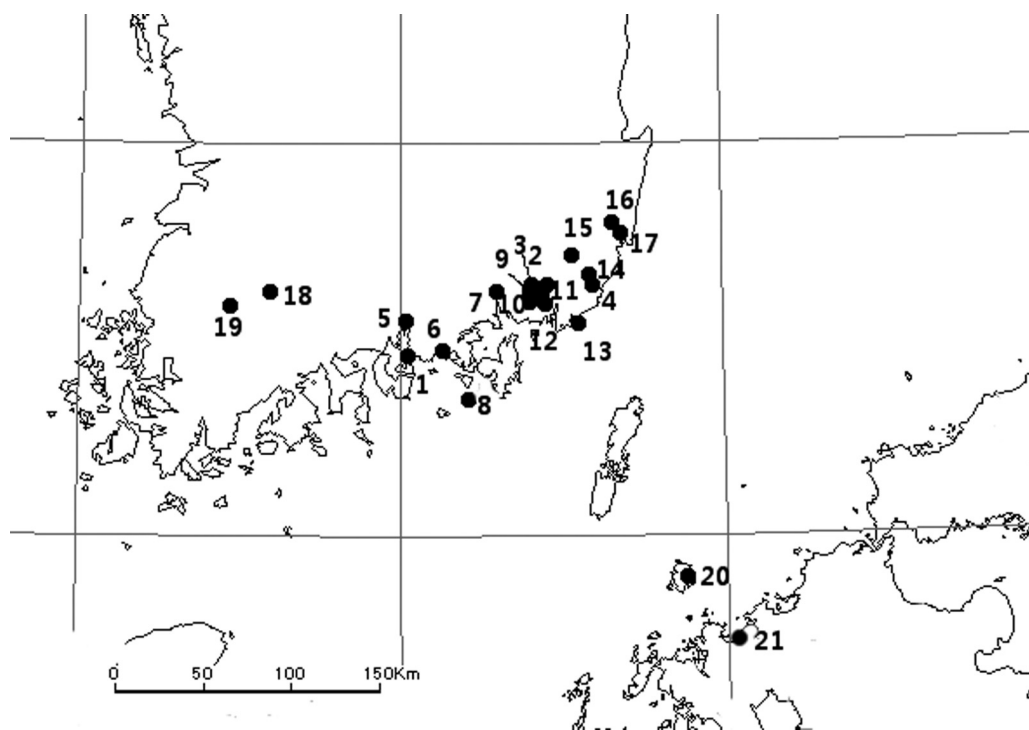


図1 朝鮮半島弥生系土器出土主要遺跡分布図

	遺跡	出土状況		出土弥生系土器型式
1	泗川勸島遺跡	住居・貝塚	A・B	城ノ越～高三瀦
2	金海龜山洞遺跡	住居	A・B	(板付Ⅱb) 城ノ越～須玖Ⅰ
3	金海大成洞焼成遺跡	土器焼成遺構	B	城ノ越～須玖Ⅰ
4	釜山萊城遺跡	住居	A・B	城ノ越～須玖Ⅰ
5	泗川芳芝里遺跡	住居・貝塚	A・B	須玖Ⅰ式～須玖Ⅱ式
6	固城東外洞遺跡	?	A・B	下大隅～
7	昌原茶戸里遺跡	?	A	須玖Ⅱ
8	統榮葛島遺跡	表採	?	?
9	金海会峴里	甕棺墓	A	金海式甕棺
10	金海興洞遺跡	住居?	B	城ノ越
11	金海池内洞	甕棺墓(副葬)	A	須玖Ⅱ
12	金海北亭貝塚		B	須玖Ⅰ
13	釜山朝島貝塚	?	B	城ノ越～須玖Ⅰ
14	釜山温泉洞	表採	B	弥生時代中期?
15	梁山北亭洞	古墳下層	B	城ノ越～須玖Ⅰ
16	蔚山達川遺跡	住居(鉄鉞石鉞山)	A	須玖Ⅱ
17	蔚山梅谷洞遺跡	住居	A?・B?	須玖Ⅱ
18	光州新昌洞遺跡	?	?	?
19	南原細田洞遺跡	?	?	?
20	原ノ辻遺跡			
21	御床松原遺跡			

表1 朝鮮半島出土弥生系土器出土遺跡一覧

の2器種のみが見られる。甕・壺形土器以外の器種が確認された例はわずかで、半島出土の弥生系土器は大半がこの2つの器種である。

そこで本稿では、分析対象をこの甕形土器と壺形土器とし、統計的な分析及び遺跡間の比較を行う。

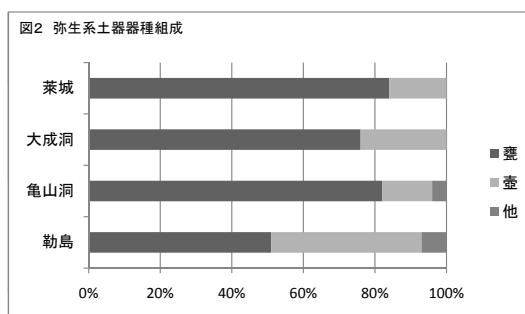


図2 弥生系土器器種組成

4. 分析

(1) 甕形土器

図2で示したように、半島内出土弥生系土器の中で最も資料数が多いのは甕形土器であるが、その多くが鋤先状を呈する口縁部を持つものである。これらは北部九州の玄界灘沿岸地域にその故地が求められる資料であり、遺跡から出土した際、在来土器とは明らかに異なる特徴であるために比較的抽出が容易である。また、突帯を有している資料の場合も抽出しやすい。一方で、突帯や丹塗りを施さない胴部や底部の破片の状態では、在来土器との区別が難しい。そのために勒島遺跡などで多くの弥生系甕形土器の口縁部が報告されながら、胴部・底部の報告が極めて少なく、全体的な器形を復元できる資料が数えるほどしかなく、型式や器種を認定するには難しさが伴う。その他にも、外反する口縁形態など朝鮮半島において同様の特徴を持つ土器が存在するものについては、弥生系土器として認定されるのは困難な場合も多いであろう。また弥生系土器として抽出された資料であっても、口縁部の小片であれば、甕形土器を甕・鉢・樽等に細分類することができない場合が多い。

しかし、これまでの弥生土器研究において、特に中期の甕の口径と器高、そして突帯の有無に強い相関関係を持つという指摘があり、口縁部の破片であっても口縁部径によって有る程度器種やサイズを同定することは可能であると考えられる。また、口縁部は型式的特長を強く表す部位であるため、個々の資料の型式を決定する基準となる。底部の形態や胴部最大径、突帯の数や位置等不足する情報が多く、さらに擬弥生土器の存在から認定が困難な場合も多いことを十分認識しながらも、本稿では半島出土甕形土器の中、口縁部上に平坦面を持つ弥生時代中期の甕形土器を対象として、口縁部の内径・外径の相関関係とサイズ、突帯の有無、A・B類の傾向を統計的処理から読み取り、I期・II期の時期区分で、対象遺跡間の比較を行うこととする。

①対象遺跡

(i) 泗川勒島遺跡 (図3～図9)

泗川市の海上に位置する勒島遺跡は交易拠点として知られ、韓国国内で最も多くの弥生系土器が出

土した遺跡で、住居跡や貝塚等様々な遺構から弥生系土器が検出された。70年代に最初の調査が行われて以来、幾度かの調査が行われてきたが、そのうち1998年から3年にわたって行われた調査が最も規模が大きく、確認された遺構・遺物の数は膨大な数である。この調査により弥生系土器資料が増加し、それにより以前は主体となる型式は須玖Ⅰ式であると考えられていたが、須玖Ⅰ式でも新しい段階と須玖Ⅱ式段階の土器も相当数存在し、むしろ後者が前者を圧倒する数であるということが明らかとなった。

I期 (図 i・ii)

勸島遺跡出土B類はすべてI期と判断した。B類は、A類に比べ若干のばらつきがあるものの、口縁部内外径の相関関係においてその傾向を同じくし、在地の要素が取り入れられているとはいえ、口縁部においては弥生土器の規格にある程度則って製作されたと判断できる。サイズの分布も、口縁部外径30cm前後の資料が見られないことを除けば、A類と重なる(図i)。I期に該当する資料の中で、突帯を有する資料はごくわずかで(図5-7等)、勸島遺跡I期資料中では最も大きいサイズである(図ii)。I期全体を見ると、口縁部外径15・20・25・30cmにそれぞれサイズの集中が見られる。これは、用途に従いサイズや器種の異なる甕形土器が搬入され、必要に応じて同様の規格で製作された忠実模倣品やB類が用いられたと考えることができる。

II期 (図 iii・iv)

勸島遺跡II期資料にはB類は含まれない⁴⁾。図iiiを見ると、突帯を有するものが20・25～30・35cmにそれぞれ分布する。II期資料中最も大きい口縁部外径35cmの資料は、全体的なサイズ分布の中心からは隔たり、口縁部の平坦面も長いことから、他の資料と用途が異なる可能性がある。突帯のない資料は、分布の中心を25cm前後とするが、20～30cmの間に比較的にまんべんなく分布する。よって突帯の有無により用途が異なり、突帯を有するものをより選択的に持ち込んでいたという可能性を示唆している。

図ivは、勸島遺跡I期・II期の資料を比較したものである。I期で見られた15cm前後の分布はII期には見られず、サイズ分布では重なりも大きい、明らかにII期資料が大型である。また、口縁部もII期に若干長くなる傾向も読み取れるが、これは型式変化によるものであろう。

(ii) 金海亀山洞遺跡 (図10～図12)

金海地方には特に弥生系土器出土遺跡が集中するが、その中でも近年行われた発掘により勸島遺跡に次ぐ数の弥生系土器が検出された遺跡である。板付Ⅱbから須玖Ⅰ式の弥生系土器が出土し、須玖Ⅰ式は特に古い様相を示しており、主体は城ノ越式～須玖Ⅰ式古段階である。亀山洞遺跡のA1地域の住居跡を中心とする遺構から、弥生系土器が多数出土し、報告書では武末純一氏により弥生系土器の検討が行われた。共伴する在地土器は円形粘土帯土器・三角形粘土帯土器で、城ノ越式段階に両者の転換期があったということを確認することができる(武末2010)。

筆者は、同遺跡出土資料を実見できていないため、A・Bの分類、そして各資料の型式に関し

て、すべて武末氏の見解に従う。ただし武末氏が擬弥生土器を、「弥生土器に特に類似しているが一部無文土器の要素が見える」ものを a 類、「無文土器に近いが一部弥生土器の要素が見える」ものを b 類として分類されものを本稿の基準で分析を行っても、両者の間に分布傾向の違いがみられなかったため、今回の分析では a 類・b 類を区別せず擬弥生土器として扱うこととした。本稿では同遺跡の対象遺物をすべて I 期に該当するものとして扱うが、図 9～11 は、武末氏の見解に従い、板付 II b・城ノ越・須玖 I 式の型式を反映させている。

I 期 (図 v)

亀山洞遺跡の対象遺物はすべて I 期で、突帯を有する資料は含まれない。口縁部外径 10～25cm の範囲に全体がおさまり、B 類に若干ばらつきが見られるものの、A・B 類共にほぼ同一線上に分布する。A 類のみを見ると、15cm 前後にひとつのまとまりがある。

(iii) 金海大成洞焼成遺構 (図 13)

亀山洞遺跡と同じ金海地域に位置する遺跡で、土器焼成遺構とその周辺の溝などから弥生系土器が出土した。これらは遺構が廃棄された後に堆積したものと考えられており、円形粘土帯土器・三角形粘土帯土器・瓦質土器と共伴して出土した。土器焼成遺という出土状況から、半島内での弥生系土器製作を検討する上で重要な資料となる。本稿で扱う資料はすべて B 類である。

I 期 (図 vi)

全て B 類と判断するが、その形態は城ノ越式から須玖 I 式のものに類似し、I 期とする。突帯を有するものは 1 点も含まれない。口縁部外径 18・20cm と 25cm 前後に分布の集中があり、多くは 15～26cm の範囲に収まる。しかし、30～45cm の半島内出土弥生系土器の中でも大型の資料が複数含まれる点の特徴的である。

(iv) 福泉菜城遺跡 (図 14)

1 号住居より出土した土器の 94% が弥生系土器で、甕が多く、城ノ越式～須玖 I 式古段階である I 期に該当する。壺も含まれるが、壺は在来の土器文化の影響を強く受けているとされ、甕も胎土の観察から朝鮮半島で製作されたとされる (申敬澈・河仁秀 1991)。しかし観察したかぎり、器形・製作技術共に弥生土器と酷似し、A 類であると判断できる。共伴する在地の土器は粘土帯土器で、鉄器も共伴する。

I 期 (図 vii)

口縁部外径 15～25cm の範囲に分布し、20cm 前後に最も集中するが、全体は同一線上に並び傾向を同じくする。対象遺物には 1 点だけ突帯を有する資料が存在する。靉島遺跡以外では唯一の資料である。

(v) 原ノ辻遺跡

原ノ辻遺跡は壱岐の内在的な発展からではなく、弥生時代前期後葉頃に北部九州沿岸域の集団によって朝鮮半島との交易を目的として経営が開始されたと考えられている。環濠集落が台地上に形成されるのは須玖Ⅰ式段階以降とされるが、台地の北西部にある低地からは前期末から中期初頭の土器とともに多くの大陸系遺物が出土していて、遺跡内でも最も多くの粘土帯土器がこの地区から出土している。特に前期末から中期初頭に円形粘土帯土器が集中して出土する。このことから前期末頃から朝鮮半島より渡来した人々がこの地区に居住していたと考えられていて、周辺には当時の高度な大陸の技術により造られた船着き場⁵⁾がある。

壱岐の土器は糸島地域をはじめとした九州各地の土器が搬入されているが、特に糸島地域の土器が多く見られることが知られ、袋状口縁壺や広口壺などの特徴を持つ土器が多く出土する。これらの土器については、多くを糸島地域から持ち込んだとする見解や、壱岐で製作されたものとする見解など様々だが、糸島地域と密接な関係を示しているとは明らかで、日韓交渉の列島側の主体や担い手を明らかにする上で大きな手掛かりとなる資料である。

分析対象は、朝鮮半島系の遺物が多数出確認され前期末頃からの弥生土器の出土が多い台地北の低地、河原畑地区・不條地区・芦辺高元地区の出土土器とし、朝鮮半島出土弥生系土器と同様、Ⅰ期：城ノ越式～須玖Ⅰ式古段階、Ⅱ期：須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式の2段階に分け分析を行った。

Ⅰ期 (図 viii)

Ⅰ期は突帯が有るもの無いものともに同一線上に分布し、ばらつきは少ない。突帯の有する資料は無いものに比べ、相対的に大型である。20～45cmの範囲に多くは収まり、最も分布が集中するのは口縁外径が25～30cm程の範囲である。35～40cmにも多く分布し、45cmを超える資料も存在する。突帯が無い資料は、15～35cmの範囲に多くは収まり、20～27cmに分布が多いことが読み取れる。

Ⅱ期 (図 ix・x)

Ⅱ期は、Ⅰ期に比べ突帯を有するものとなないものの差ははっきりと表れ、突帯を有するものは25～35cmの間に多く分布し、無いものは15～30cmの間に分布する。突帯を有するものは口縁部の長さに分布の幅が見られるようになる。これは、Ⅱ期に多く見られるより口縁の長い丹塗り土器など、甕形土器の器種が多く製作されるためである。

Ⅰ期とⅡ期を比較すると(図 x)、Ⅱ期は型式的変化により口縁部が伸びていることが分かる。またサイズを見ると、分布の範囲には変化がないが、Ⅰ期はどのサイズでもまんべんなく分布し、20～25cmに集中が見られ、Ⅱ期はⅠ期に比べ分布の集中が顕著に見られ、特に25～30cm付近に集中するということが分かる。

②比較

Ⅰ期では、靉島遺跡出土資料を、亀山洞遺跡・大成洞焼成遺構・萊城遺跡と比較を行うことで

その特徴を明らかにし、さらには半島内の遺跡と原ノ辻遺跡資料と比較する。Ⅱ期では靉島遺跡と原ノ辻資料の比較及び、Ⅰ期の様相との比較を行い、次の考察につなげたい。

Ⅰ期

(i) 靉島遺跡Ⅰ期—金海 亀山洞遺跡 (図 xi・xii)

図 xi は靉島遺跡Ⅰ期と亀山洞遺跡資料全体を比較した図である。これを見るとサイズの分布は近い値をしめしているものの、細かい部分だが、亀山洞遺跡資料だけに 10～15cm の分布が見られること、靉島遺跡資料が亀山洞資料に比べ口縁部が長い傾向が見られることなどが注目される。図 x II で両遺跡の A 類資料のみの比較結果を示した。25cm 以上の分布は靉島遺跡資料でしか見られず、やはり靉島遺跡資料のほうが、わずかに口縁部が長い傾向があるが、両者の分布はよく似ている。

(ii) 靉島遺跡Ⅰ期—金海 大成洞焼成遺跡 (図 xiii)

靉島Ⅰ期と大成洞焼成洞遺跡の資料を比較すると、靉島資料の主体が A 類、大成洞資料が B 類であるが、分布の集中域は重なりを見せる。

(iii) 靉島遺跡Ⅰ期—福泉洞 菜城遺跡 (図 xiv)

菜城遺跡も、靉島Ⅰ期資料の 25cm 以下の範囲の分布集中と似る。

(iv) 金海 亀山洞遺跡—大成洞焼成遺跡 (図 xv)

亀山洞遺跡と大成洞焼成遺跡は、金海地方の比較的近い位置関係であり、両遺跡とも B 類が多くⅠ期の土器のみが出土するということを考えると、深い関係にあると考えてよいだろう。しかも、大成洞焼成遺跡では直接遺構に伴ってはいないとはいえ、焼成遺構内から弥生系土器が確認されているということは、両遺跡出土の擬弥生土器が大成洞遺跡で焼成されたという可能性もある。しかしながら、亀山洞遺跡と大成洞焼成遺跡の散布図を比較してみると、同一線上に分布し、分布中心域のうち口縁部外径 15～25cm の範囲では重なりを見せるが、サイズに違いが見られる。15～25cm 範囲の分布は重なるが、亀山洞では 15cm 以下の土器が多く見られるのに対し大成洞では見られず、反対に大成洞では 30cm を超えるサイズのものが数点確認されるのに対し、亀山洞では一切確認できない。

(v) 原ノ辻遺跡Ⅰ—靉島遺跡Ⅰ期 (図 xvi)

原ノ辻遺跡Ⅰ期と靉島遺跡Ⅰ期を比較すると、明らかに靉島遺跡資料が小さいサイズに分布があることが分かる。原ノ辻はおよそ 15～40cm の範囲にまんべんなく分布し、わずかに 20～30cm の範囲に集中しているが、靉島遺跡には原の辻では見られない 15cm 以下とおよそ 20・25cm の範

皿、そして 30cm 前後の 3 つに分布の集中があり、30cm を大きく超えるサイズのものは見られない。口縁部内外面の相関関係はその傾向を同じくしているといえる。

(vi) 原ノ辻遺跡 I 期—亀山洞遺跡 (図 xvii・xviii)

両遺跡の分布は大きく異なる。亀山洞資料には 20cm 以下に分布が多く、原ノ辻では見られない 10～15cm の資料も複数見られる。A 類資料のみを原ノ辻 I 期と比べても、明らかに両者のサイズは重ならない。また口縁部内外面の相関関係に注目しても、サイズが大きくなるにつれその傾向に差が生じ、原ノ辻遺跡資料は亀山洞遺跡資料に比べ口縁部が長いこと読み取れる。原ノ辻 I 期と亀山洞遺跡の A 類を比較しても同様である。

(vii) 原ノ辻 I 遺跡期—大成洞焼成遺跡 (図 xix)

(iv) で見たように、大成洞焼成遺跡と亀山洞遺跡はその分布集中域の多くは重なるが、大成洞焼成遺跡にのみ 30cm を超える資料が存在した。これらの資料は、半島内の I 期資料の中では最も大型であるが、原ノ辻遺跡資料と比較すると、分布が集中する範囲内に収まることが分かる。

(viii) 原ノ辻遺跡 I 期—萊城遺跡 (図 xx)

前述の通り萊城遺跡出土の資料は北部九州の弥生土器と形態的・技術的に非常に類似している。口縁部内外径の相関関係の傾向は原ノ辻 I 期とほぼ同じくするが、サイズを見るとその分布は大きく異なっていて、15～25cm の範囲に収まるサイズの資料しかない。ただし、金海 亀山洞や靑島遺跡 I 期のように、原ノ辻 I 期にみられない 15cm 以下には分布しない。

II 期

(i) 原ノ辻遺跡 II 期—靑島遺跡 II 期

II 期は、I 期に比べると両者の分布は近づくが、原ノ辻では 20～35cm までの広い範囲に分布が多く見られるのに対し、靑島遺跡では 20～30cm に収まる範囲内に分布が最も集中する。また、原ノ辻では口縁部がより長い資料が複数見られるようになり、これらは丹塗り甕などの甕形土器であるのだが、靑島遺跡ではそういった資料はあまり見られない。

I 期では靑島遺跡の資料に突帯を有する資料が少ないため比較できなかったが、II 期の資料を口縁部下の突帯の有無に注目して比較すると、口縁部外径 20cm と 25～30cm の分布が共通していることが分かる。

(1) 壺形土器

壺形土器を広口壺・短頸壺・袋状口縁壺に細分類し、対象遺跡ごとに各器種が占める割合を図 15 に示した。また、広口口縁壺は口縁部の形態から上面に平坦面を持つ鋤先状口縁壺と素口縁壺

に分類した。(図 16) この中には糸島地域に見られる特徴を有する資料も複数含まれるが、小片で地域的特長までを見出すことができなかつた資料の中にも、このような資料が含まれる可能性が高く、糸島地域系資料の正確な割合を示すのは不可能と考え本分析では抽出を行わなかつた。これらの資料に関しては考察にて言及したい。袋状口縁壺は、北部九州沿岸域を中心に広く見られる突帯を持たないものと、糸島地域に特徴的な口縁部と頸部に数条の突帯を有するものに分類し図 17 に示した。

菜城遺跡資料でその他と示している資料は、従来から在来の土器の特徴を強く持つと考えられている資料であり、擬弥生土器というよりは、在来土器として捉えるべきであろう。その資料を除くと全て口縁部が鋤先状の広口壺である。甕形の型式と同様、内側に短く張り出す形態から見て、城ノ越式から須玖 I 式古段階 (I 期) の資料である。

同様の様相を見せるのは大成洞焼成遺跡で、対象資料の全てが I 期の鋤先状口縁壺であり、個々の資料の観察によると、小片であるため慎重な判断が必要であるが、B 類である可能性が高い。

菜城・大成洞とは異なり、亀山洞遺跡資料には、広口壺の他に短頸壺が含まれる。また、大きな割合を占める広口壺も鋤先状口縁壺が 6 割、素口縁広口壺が 4 割で、素口縁壺が高い割合で含まれる。同じ金海地域内の遺跡であっても、大成洞焼成遺跡と亀山洞遺跡出土の壺形土器の様相は異なり、B 類が主体を占める大成洞焼成遺跡と A 類が主体を占める菜城遺跡の様相が類似することは注目すべき点である。

勸島遺跡では、甕形土器と同様、壺形土器においても II 期に該当する資料が多く見られる。他の対象遺跡には存在しない袋状口縁壺が多く含まれる点も、勸島遺跡は II 期の資料が主体であることを示している。広口口縁壺は壺全体の 7 割近くであるが、そのうちごくわずかが素口縁で、9 割以上が鋤先状口縁壺である。個々の資料を見ると内側に張り出し平坦部が短く I 期に分類できる資料も含まれるものの、大半は II 期に該当する。また、形態・調整技法・丹塗り土器の存在などから見て、ほとんどが A 類であると判断できる。図 7-18、図 7-50 などは、糸島地域の特徴を有している。袋状口縁壺ではさらに糸島地域の特徴を持つ資料が顕著で、全体の 9 割を占め、北部九州の広い地域で見られる器形を圧倒する。

原の辻遺跡の分析対象とした調査区出土の壺形土器は I 期・II 期それぞれに該当する型式の資料を含む。器種構成を見ると、列島の他地域からもたらされた資料や特殊な器形の資料を除いた割合は、勸島遺跡の器種構成のそれと類似する。しかし、広口壺と袋状口縁壺をそれぞれ詳しく見てみると両遺跡の資料はその様相を異にする原の辻遺跡資料の広口壺は、鋤先状口縁壺 7 割、素口縁壺 4 割で、袋状口縁壺のうち糸島地域的特長を有するのは 5 割弱である。上述したように勸島遺跡では、広口口縁壺の内鋤先状口縁壺が、袋状口縁壺では糸島の特徴を持つ資料が圧倒している。原の辻遺跡と勸島遺跡の壺形資料の器種構成は類似するが、勸島遺跡資料により強い糸島地域の特徴が現れるという分析結果が得られた。

(1) 小結

I 期

前期後半期の弥生系土器もわずかであるが確認されている金海地方では、I 期において最も多くの弥生系土器が存在する。金海 亀山洞遺跡からは北部九州の弥生土器と形態的・製作技術的に近い A 類と B 類の弥生系土器が共伴して出土した。亀山洞遺跡資料の中、甕形土器のでは、A・B 類間にサイズや口縁部相関関係の傾向の違いは見られなかった。同じく金海 大成洞焼成遺跡でも弥生系土器が多く出土しているが、亀山洞遺跡と異なり甕形資料のほとんどが B 類である。亀山洞遺跡と大成洞焼成遺跡出土の甕形土器資料を分析した結果、口縁部の口縁部内外径の相関関係・サイズの分布が集中に類似が見られるが、大成洞遺跡のほうに相対的に大きいサイズのものが多い。釜山地域に位置する福泉洞萊城遺跡出土の甕形土器は、すべて A 類であるが、B 類を含む亀山洞・大成洞遺跡資料の分布集中範囲と類似した結果が得られた。以上の 3 遺跡と靑島遺跡出土甕形土器資料を比較したところ、3 遺跡と同様、最も分布が集中する範囲を同じくしていた。ただし、他の 3 遺跡とは、突帯を有する資料が多く含まれること、サイズ分布に 3 つのまとまりが認められることなど、異なる点も見られた。I 期の朝鮮半島出土弥生系土器と原ノ辻遺跡 I 期の資料と比較すると、両者の間には、大きな差異があることが明らかとなった。第一に、原ノ辻遺跡出土甕形土器に比べ半島の資料は、小さいサイズに分布が集中し、口縁部内外面の相関関係から判断すると、口縁部の長さがより短いことが分かる。また、原ノ辻遺跡 I 期の甕の約半数は突帯を有し、突帯を持たない甕よりも相対的にサイズが大きいという特徴がある。亀山洞遺跡と大成洞焼成遺構と出土の甕系土器の中に、突帯を有する資料は 1 点もなく、萊城遺跡でも、突帯を有する資料はわずかに 1 点という結果であった。靑島遺跡 I 期の資料には数点突帯を有する甕系土器が存在するものの、原ノ辻遺跡の約半数という割合には全くおよばない。

甕形土器以外の器種では壺形土器が対象遺跡すべてで出土している。大成洞焼成遺構と萊城遺跡では広口壺と在地の特徴を持つ壺のみであるが、亀山洞遺跡では広口壺の他に短頸壺も見られ、靑島遺跡以外で唯一、甕・壺形以外の器種の弥生系土器が出土している。

II 期

I 期の分布の中心であった金海地域の対象遺跡からは II 期段階には、弥生系土器は確認されなくなり、靑島遺跡に分布が集中するようになる。資料はほとんどが A 類である。I 期では原ノ辻遺跡の資料と比べサイズが明らかに小さかったが、II 期には両遺跡の資料は、突帯の有無・サイズ・口縁部内外径の相関関係において傾向を同じくするようになり、強い関係性をうかがわせる。壺形器種を見ても、素口縁・鋤先状口縁の広口壺、短頸壺、袋状口縁壺など器種構成が原ノ辻と共通し、糸島地域の特徴を持つ器種も高い割合で含まれることは注目される。

4. 考察

分析から得られた結果と、個々の遺物の観察結果から、原ノ辻遺跡と靉島遺跡などの朝鮮半島南部地域との関係を軸にそれぞれ想定される交渉の復元を試みたい。

(1) I 期

靉岐平野の台地上に環濠集落が築かれる以前、弥生時代前期末に台地の北西部の低地に北部九州の集団と朝鮮半島から渡来した人々とによって、原ノ辻の集落が開始される。弥生時代前期後半の土器とともに円形粘土帯土器が出現し、中期初頭までに多くの円形粘土帯土器が靉岐内に持ち込まれる。弥生時代前期後半は、朝鮮半島から対馬・靉岐、そして北部九州を中心とした九州各地に円形粘土帯土器が搬入され、変容しながら弥生文化と融合していく時期である。これは、朝鮮半島の政治変動から韓人が北部九州に渡来・移住した時期であり（白井 2001）、日韓の交渉は朝鮮半島からの人や文物の流入が主な流れで、日本から朝鮮半島への人・文物の動きはごくわずかなものであったという理解がなされてきた。しかし、靉岐の集落開始は、靉岐島内の内在的な発展に求めることは困難であり、北部九州沿岸地域の集団によって朝鮮半島との交易を目的として経営が開始されたと考えられている（宮崎 2001）。つまり原ノ辻遺跡は当初から朝鮮半島との交渉の中継地・拠点的な集落として開始されたのである。金海 亀山洞遺跡や金海 会峴里貝塚から弥生時代前期後半段階の弥生系土器がわずかながらも確認されていることも、半島から一方的に文物が流入したのではなく、半島との交渉を北部九州沿岸の集団が自らの側から求めた結果であると考えることができる。ただし、これまでに確認されている前期後半から前期末の弥生系土器は、金海 会峴里貝塚甕棺墓の甕棺を含めてもごくわずかであり、本格的な流入はこの時期には始まっていない。

原ノ辻遺跡の台地北西部の低地では、中期初頭から中期前半期、土器型式で城ノ越式から須玖 I 式古段階に朝鮮半島からの土器の流入は急激に鈍化するが、反対に日本側からの朝鮮半島への土器の流入はこの段階本格化する。金海地域の亀山洞遺跡・大成洞焼成遺跡での集中した弥生系土器出土以外にも、沿岸部・島嶼部の多くの遺跡から散発的な分布が見られる。釜山地域の萊城遺跡では住居跡より鉄器と相伴して搬入品、又は忠実模倣品の弥生系土器が出土していることから、列島から半島へ、鉄器や青銅器を求めて人の移動・移住が行われたと考えることができる。

しかしここで問題となるのは、擬弥生土器のみならず搬入もしくは忠実模倣品と判断された弥生系土器が、原ノ辻遺跡 I 期の資料と比べると明らかに小型であることである。朝鮮半島在来土器が弥生土器に比べサイズが小さいことはこれまでも指摘されていて（中園 1993）、擬弥生土器の場合は、製作者が在来の生活様式に適応させて土器のサイズを採用したと考えればよい。しかしながら、靉島遺跡や亀山洞遺跡・萊城遺跡において A 類と判断された資料も、原ノ辻遺跡の弥生土器の傾向とは大きくことなり、むしろ擬弥生土器とその傾向を同じくする。また、原ノ辻の甕形土器の約半数が突帯を有しているのに対し、資料数の多い亀山洞遺跡・大成洞焼成遺跡には突帯を有する資

料が存在せず、靺鞨遺跡・萊城遺跡においても、突帯を有する資料はごくわずかである。これらの理由をそれぞれ考察してみる。

まず、半島資料のうち A 類が原ノ辻資料に比べ小型なことに対しては、①船などでの長距離の移動に適した小型の土器が選択され、それらが列島より持ち込まれたため、②半島からの搬入ではなく、半島に渡った弥生土器製作技術を持った人物により、サイズだけを在地の生活様式に合わせて製作したためという 2 つの理由を考えることができる。

また突帯に関しては、突帯の有無になんらかの機能差、用途の差があったと考えることができるだろう。突帯の無い甕形土器を選択して半島へと持ち込み、現地で新たに製作する際にも、突帯を持たない甕形土器のみを選んでいくことから明らかである。ただし、その機能差・用途差がなんであったのかを論じることができる証拠は現時点で存在しない。

いずれにしても、組織的な交渉ルートにより交易が行われていたというよりは、小規模な交渉が複数の地域同士で行われていたと考えることができるだろう。またその交渉には列島からの移住が伴っていたが、半島出土弥生系土器と原ノ辻で見られる土器様相に比べ小型甕形土器とわずかな壺に限られることを見れば、長期に及ぶものではなかと考えられるだろう。B 類が在来の土器と共伴したり、土器焼成遺構から出土するという現象も、在来の土器文化に影響を与えたり、在来の土器文化と同化したことに理由を求めるよりは、列島からの移住者が、短期間の居住に必要な土器を在来の土器で代用したり、在来の土器製作技術を持つ人物への要求に理由を求めるほうが自然である。

この時期に原ノ辻はまだ拠点集落というよりは、交通上の中継地点という性格が強かったと考えることができ、原ノ辻遺跡出土土器と朝鮮半島出土の弥生系土器との直接的な関連を見出すことはできない。一方この時期の靺鞨遺跡は、拠点集落としての機能を一部持ち始めてはいるが、あくまでも各地で小規模に行われる交渉の一つの場としてとらえるべきである。

(2) II 期

朝鮮半島における弥生系土器の様相は、須玖 I 式古段階と須玖 I 式新段階の境を画期として一変する。弥生系土器の分布の中心地であった金海地域では、須玖 I 式新段階以降の土器は集落遺跡内から出土することがなくなり、I 期に沿岸部や島嶼部において散発的に見られた擬弥生土器の分布も見られなくなり、須玖 II 式の袋状口縁壺 (A 類・搬入) が在来の墓制である甕棺墓に副葬品として副葬されるなどの、限定された分布様相となる。

一方で、靺鞨遺跡ではその存続期間を通じて最も多くの弥生系土器が II 期に持ち込まれる。そのほとんどが原ノ辻遺跡出土弥生土器と様相を同じくする A 類であり、B 類は見られない。I 期には金海地域の弥生系土器と類似した様相を見せていたが、II 期の資料は原ノ辻遺跡の土器と関連が想定できる傾向を示している。すなわち、原ノ辻から靺鞨へと直接的な土器の移動があった可能性があるということである。しかし、原ノ辻で見られる 35cm を超える大型の甕や、口縁部が長く丹塗りと暗文が施された甕が、靺鞨遺跡からはほとんど確認されていないなど、両者は異なる様相も

見せる。ただ、靉島遺跡Ⅱ期においてB類が全くみられないこと、この時期に運搬や貯蔵に適した壺形土器の資料数が増加することなどを考慮すると、靉島にもたらされた土器は、生活要具としてではなく、交易品を入れる容器という機能を持っていたと考えることができる。そう考えると、35cmを超える大型の甕は船による運搬に適さないために使用されず、容器として壺形土器と運搬がしやすい小型から中型の甕が選択されたことになる。そこには運搬用容器としてのある程度の規格が存在していた可能性を想起させる。また、半島出土の甕形土器は、その大半が鋤先状口縁を呈する器種で、原ノ辻をはじめとして北部九州では普遍的に見られる、前期の如意形口縁部の系譜を持つ外反口縁の甕形土器が、ほとんど見られないことも、鋤先状の口縁が蓋（おそらく木製）とセットで、運搬に適した口縁部の形状であったために選択的に用いられたためとも考えることも可能となる。

靉島遺跡Ⅱ期の弥生系土器が、原ノ辻と強い関連を持った運搬用容器である場合、Ⅰ期で想定された集団の移住に伴った半島への搬入と擬弥生土器の製作とは全く異なった搬入の契機と背景が想定される。すなわち、原ノ辻と靉島を中継地とした中継地貿易の確立である。後藤直氏は、朝鮮系無文土器や金海式灰陶が、中期後半以降に北部九州の島嶼部で出土する現象を、それ以前の島嶼部の人々が単なる交通手段の提供者程度の存在から、この時期に日本列島と朝鮮半島の積極的な仲介者となったことに理由を求めた（後藤 1979）。これと同様に、半島出土の弥生系土器の出土様相からもⅠ期とⅡ期の間に、両地域の交渉のスタイルに変化が生じたというこということができる。原ノ辻遺跡において須玖Ⅰ式新段階の時期は、台地上に環濠集落が成立し、大陸の高度な土木技術により造られた船着き場が機能し始める時期である。このような靉島・原ノ辻と同様にみられるⅠ期とⅡ期の間の交易拠点への発展現象は、前漢の武帝による楽浪郡を含めた4郡の設置による交易の活発化によるものと考えられる。Ⅰ期の複数地域による小規模な交流の中継地から、楽浪郡設置による東アジア全体の交易の活発化にともなって、鏡や鉄などを求めた北部九州沿岸地域集団の積極的な関与により、交易拠点として発展を遂げる。北部九州の集団の、Ⅰ期よりもさらに積極的な働きかけによって、Ⅱ期中継貿易の拠点へと発展を見せた原ノ辻は、列島各地からもたらされた交易品が集約される中継地となったのである。

同じく半島側の交易拠点である靉島で見られる弥生系土器が、原ノ辻遺跡と強い関連性を持ち、運搬に適した器種が集中することも説明がつく。Ⅰ期にはその経営が開始されたものの、小規模な交渉の中継地又は一拠点としての役割であった靉島遺跡は、原ノ辻と時を同じくしてこの時期に、原ノ辻と直接的なルートを確認させ、交渉を集約的に担った交易拠点へと成長をとげたのである。その背景として、原ノ辻と同様に、北部九州の集団の積極的な求めと、中継貿易システムの確立があったと考える。

弥生時代中期後半に袋状口縁壺などの糸島地域特有の土器が多く原ノ辻にもたらされることから、原ノ辻を中継地とした交易に糸島地域の集団が深く関わっていると考えられる。これは、糸島地域の集団が中継貿易を主体的に担っていたことを想定させるが、中期後半期までには糸島地域が

一元的に交渉を掌握していたというわけではないようだ。

宍岐では、遠賀川以東系、中九州系、山陰系の弥生時代中期段階の土器も複数出土し、原ノ辻と同様に勒島遺跡出土のⅡ期段階の資料中にも、遠賀川以東系や山陰系の土器が複数含まれていることが明らかとなっている。これは、糸島地域集団を含む、玄界灘沿岸域の集団以外にも直接的に、交易拠点である原ノ辻と関係を持ち、なおかつその土器の一部が勒島とも直接的に関係するということを示す。

Ⅱ期は、原ノ辻遺跡と勒島遺跡を結ぶ交易ルートを利用し、糸島地域をはじめとした北部九州の地域集団が主体となり積極的に朝鮮半島と勒島を通じた楽浪郡との交易をおこなっていた時期であり、その交渉には中九州・山陰地域の集団も、直接的に関わっていたと考えられる。

(3) 勒島解体以降

弥生時代中期以降、勒島遺跡で弥生系土器は急激に減少する。弥生時代後期初頭段階の土器もわずかに数点確認されているのみで、時を同じくして勒島遺跡自体が解体され、交易拠点としての役割を終えると考えられる⁶⁾。一方、原ノ辻遺跡では中期後葉段階までに環濠の埋没と船着き場の機能停止などの現象が見られるが、後期前葉に再整備が行われるなど交易拠点として機能し続け、4世紀中ごろ、楽浪郡の滅亡と時を同じくして集落が解体すると考えられている。朝鮮半島での弥生時代後期初頭以降の弥生系土器の出土は極端に少なくなる。

5. おわりに

土器を比較するには、口縁部径・底部系・胴体部径・器高など様々な属性を総合的に比較しなければならないが、朝鮮半島出土弥生土器を対象とした場合には、完全な形に復元できることはまれで、多くは小片であるため読み取ることのできる情報が少ないのが現状である。よって本稿では口縁部から得られる情報のみを利用して比較することを試みた。また、資料の増加により可能となった弥生土器資料の統計的な分析も、個々の資料の観察を十分に反映させているとは言い難く、問題も多いことを自覚するが、出土土器全体の傾向を読み取ることにより一定の意味があるものと考えた。本稿では原ノ辻遺跡と勒島遺跡の出土土器の比較に主眼を置いていたため、北部九州各地域の土器の分析は行うことができなかった。御床松原遺跡などの弥生時代中期以降の半島系遺物が出土した玄界灘沿岸地域などを対象に、弥生土器と半島系土器の総合的な分析を行い、当時の日韓交渉像を復元していきたいと考えている。

謝辞

本稿は2009年12月に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した修士論文に基づいて作成した。執筆にあたって東京大学考古学研究室の先生方、そして釜山大学校考古学科の先生方に多大なるご指導をいただいた。この場を借りて御礼申し上げます。

註

- 1) 日本列島からの搬入品または忠実模倣品など、弥生土器と形態的にも技術的にも変わらない資料と弥生土器に朝鮮半島在来の土器の要素が一部見られるもの、在来の土器の一部に弥生土器の要素が見られるものなどを総称して弥生系土器とする。
- 2) 筆者も2010年の論文(李・石丸 2010)で黒髪式である可能性のある甕として靉島遺跡出土の甕を報告しているが、弥生時代中期の糸島地方でも口縁部が内湾する甕が多数存在するため、今後検討が必要な資料である。
- 3) 研究者によっては須玖Ⅰ式の最も新しい段階という見解もある。
- 4) 金海亀山洞遺跡出土資料のうち、板付Ⅱbの可能性のある資料として図〇-〇-〇が挙げられているが、いずれも「無文土器に近いが一部弥生土器の要素が見える」ものであるb類と分類されている。そのため、現在のところ同遺跡では確実な弥生時代前期の型式の資料はないものとした。ただし、同じ金海地域の遺跡から数点前期末型式の資料が報告されていることから、金海地域に前期末の型式から弥生系土器が朝鮮半島内に出現した可能性が高い。
- 5) 船着き場の建造時期と使用時期に関しては、船着き場遺構の盛り土より須玖Ⅰ式古段階の土器が出土しており、築造は弥生時代中期前半以降である。
- 6) 靉島の解体に関しては、寺井誠氏(寺井 2009)や、井上主税氏(井上 2010)の論文に詳しい。

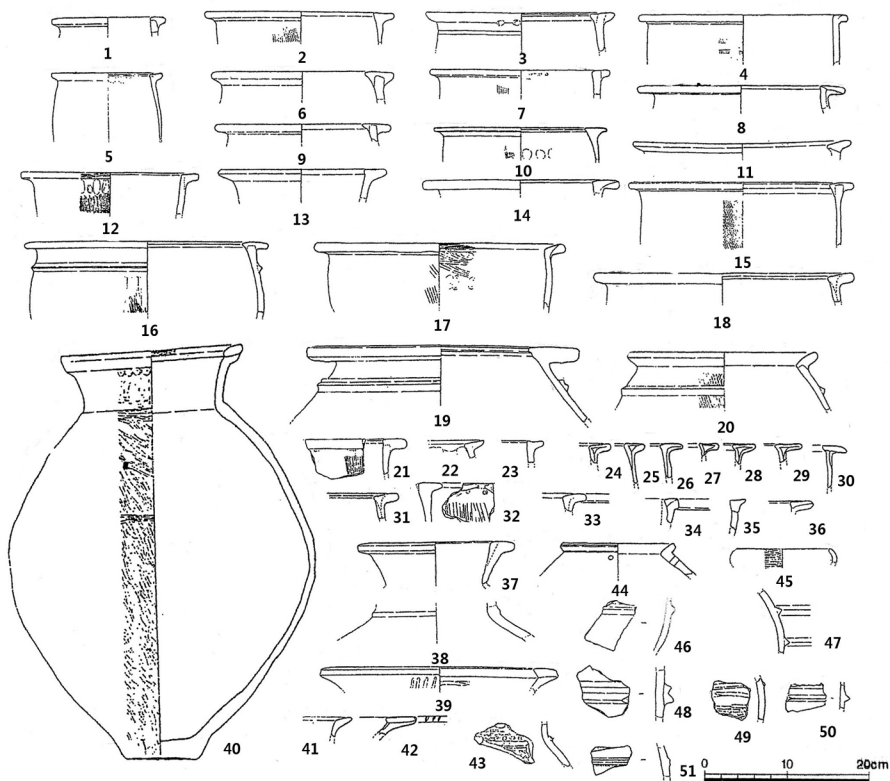
引用・参考文献

<日本>

- 井上主税 2010 「靉島遺跡」季刊考古学
- 片岡宏二 1997 「渡来人の集落」『考古学による日本の歴史』10 雄山閣
- 片岡宏二 1999 『弥生時代 集落と土器・青銅器』雄山閣
- 片岡宏二 2001 「海峡を往来する人と土器 - 壹岐原ノ辻遺跡出土の擬朝鮮系無文土器を中心に -」『勾玉』山中英彦先生退職記念論文集刊行会
- 片岡宏二 2006 『弥生時代 渡来人から倭人社会へ』雄山閣
- 後藤直 1979 「朝鮮系無文土器」『三上次男博士頌寿記念・東洋史・考古学論集』三上次男博士頌寿記念論文集編纂委員会
- 後藤直 2006 『朝鮮半島初期農耕社会の研究』同成社
- 後藤直 2001 『弥生時代における九州・韓半島交流史の研究』
- 白井克也 2001 「靉島貿易と原の辻貿易 - 粘土帯土器・三韓土器・楽浪土器からみた弥生時代の交易 -」『第49回埋蔵文化財研究集会 弥生時代の交易 - モノの動きとその担い手 - 発表要旨』
- 武末純一 1991 『土器からみた日韓交渉』学生社
- 武末純一 1987 「弥生土器と無文土器 三韓土器 - 併行関係を中心に -」『三佛金元龍教授定年退職記念論叢』
- 武末純一 2003 「弥生時代と年代」『21世紀を拓く考古学②考古学暦年代』
- 武末純一 2004 「弥生時代前半期の暦年代 - 九州北部と緒戦半島南部の併行関係から考える -」『福岡大学考古学論文集 - 小田富士雄先生退職記念』
- 平美典 2001 「韓半島出土弥生系土器からみた日韓交渉」『弥生時代における九州・韓半島交流史の研究』
- 田畑直彦 2004 「周防・長門における弥生時代中期の土器と併行関係」『弥生中期の併行関係』
- 沈奉謹・金宰賢 2001 「靉島遺跡の意義」『弥生時代における九州・韓半島交流史の研究』
- 沈奉謹・中園聡 1997 「三千浦靉島遺跡出土の凹線文系土器について」『文物研究』創刊号
- 坪根伸也・服部真和 2004 「東南部九州地域の弥生中期中葉から後期前葉」『弥生中期の併行関係』
- 寺井誠 2009 「固城外遺跡」
- 中園聡 1993 「折衷土器の製作者 - 韓国靉島遺跡における弥生土器と無文土器の折衷を事例として -」『史淵』

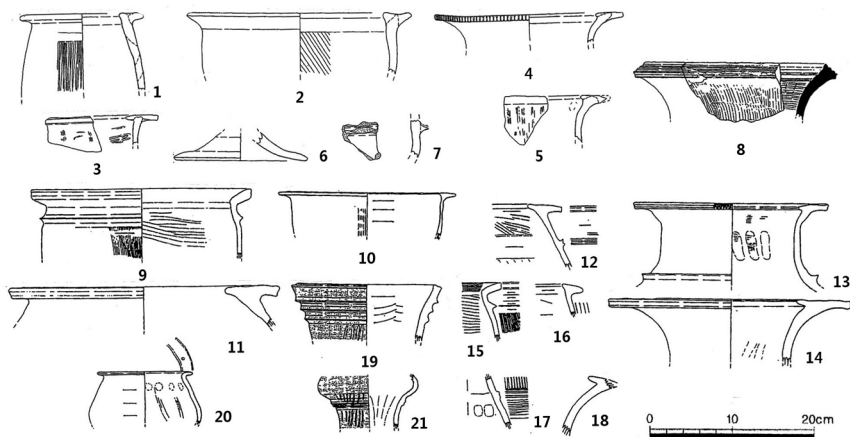
- 西谷正 1986 「朝鮮半島と弥生文化」『弥生文化9』雄山閣
- 朴淳發 2004 「遼寧粘土帶土器文化の韓半島定着過程」『福岡大学考古学論文集—小田富士雄先生退職記念』
- 町田和幸 「老岐における弥生時代の交易」『第49回埋蔵文化財研究集会 弥生時代の交易—モノの動きとその担い手—』
- 宮崎貴夫 1998 「壹岐原ノ辻遺跡の弥生時代船着き場」『環濠集落と農耕社会の形成』九州考古学会・嶺南考古学会
- 宮崎貴夫 2001 「原ノ辻遺跡における歴史的契機について」西海考古第4号
- 宮崎貴夫 2008 「老岐・原ノ辻における弥生時代の渡来集団」考古学ジャーナル, 568
- 村上恭通 2003 「中国・朝鮮半島における鉄器の普及と弥生時代の実年代」考古学ジャーナル 501
- 村上恭通 1999 『倭人と鉄の考古学』青木書店
- 村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- 米田美江子 2004 「山陰西部の須玖式土器併行期の様相—特に出雲西部を中心に—」『弥生中期の併行関係』
- 李昌熙 2004 「勒島遺跡出土の外來系遺物報告—勒島Ⅲ期の設定とともに—」『勒島貝塚と墳墓群』釜山大学校博物館
- 李昌熙 2008 「在來人と渡來人」『多様化する弥生文化』弥生時代の考古学 3, 同成社
- 志摩町教育委員会 1983 『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第3集
- 長崎県教育委員会 『原ノ辻遺跡』長崎県原ノ辻遺跡事務所調査報告書, 1～33集
- < 韓国 >
- 申敬澈 1980 「熊川文化期紀元前上限説の再考」『釜山史学』第4号
- 申敬澈 1984 「釜山 東萊温泉洞出土 無文土器」『伽耶通信』10,
- 申敬澈・河仁秀 1991 「後期無文土器と弥生土器系土器」『日韓交渉の考古学—弥生時代編—』, 小田富士夫・韓炳三編, 六興出版
- 武末純一 2006 「」 慶南考古学研究所 2006 『勒島貝塚』V 考察編
- 武末純一 2010 「金海龜山洞遺跡 A I 区域の弥生系土器を取り巻く諸問題」慶南考古学研究所 2010 『金海 龜山洞遺跡』X 考察編
- 沈奉謹 1982 「金海池内洞甕棺墓」韓考古学報 12、韓国考古学協会
- 鄭澄元・申敬澈 1987 「終末期無文土器に関する研究 南部地方を中心にした予備的考察」『韓国考古学報』20
- 中村大介 2008 「青銅器と初期鉄器時代の編年と年代」『韓国考古学報』68
- 李昌熙・石丸あゆみ 2010 「勒島遺跡出土弥生系土器」『釜山大学校考古学科 20周年記念論文集』
- 慶南考古学研究所 2003 『勒島貝塚』-A 地区・住居群 -
- 慶南考古学研究所 2006 『勒島貝塚』I～V
- 慶南考古学研究所 2010 『金海 龜山洞遺跡』X 考察編
- 東亜大学校博物館 2005 『泗川 勒島 C1』
- 釜山直轄市博物館 1989 『東萊福泉洞萊城遺跡』釜山直轄市立博物館調査報告第5冊
- 釜山大学校博物館 1989 『勒島住居址』釜山大学校博物館遺跡調査報告第13号
- 釜山大学校博物館 2004 『勒島貝塚と墳墓群』
- 釜山大学校博物館 1998 『金海 鳳凰臺遺跡』
- 釜山大学校博物館 1984 『伽耶通信』第10号
- 釜山大学校博物館 1986 『伽耶通信』第15・16合併号
- 釜山大学校博物館 1990 『伽耶通信』第19・20合併

石丸 あゆみ



※釜山大学校博物館 1989、申敬澈 1980 を基に作成

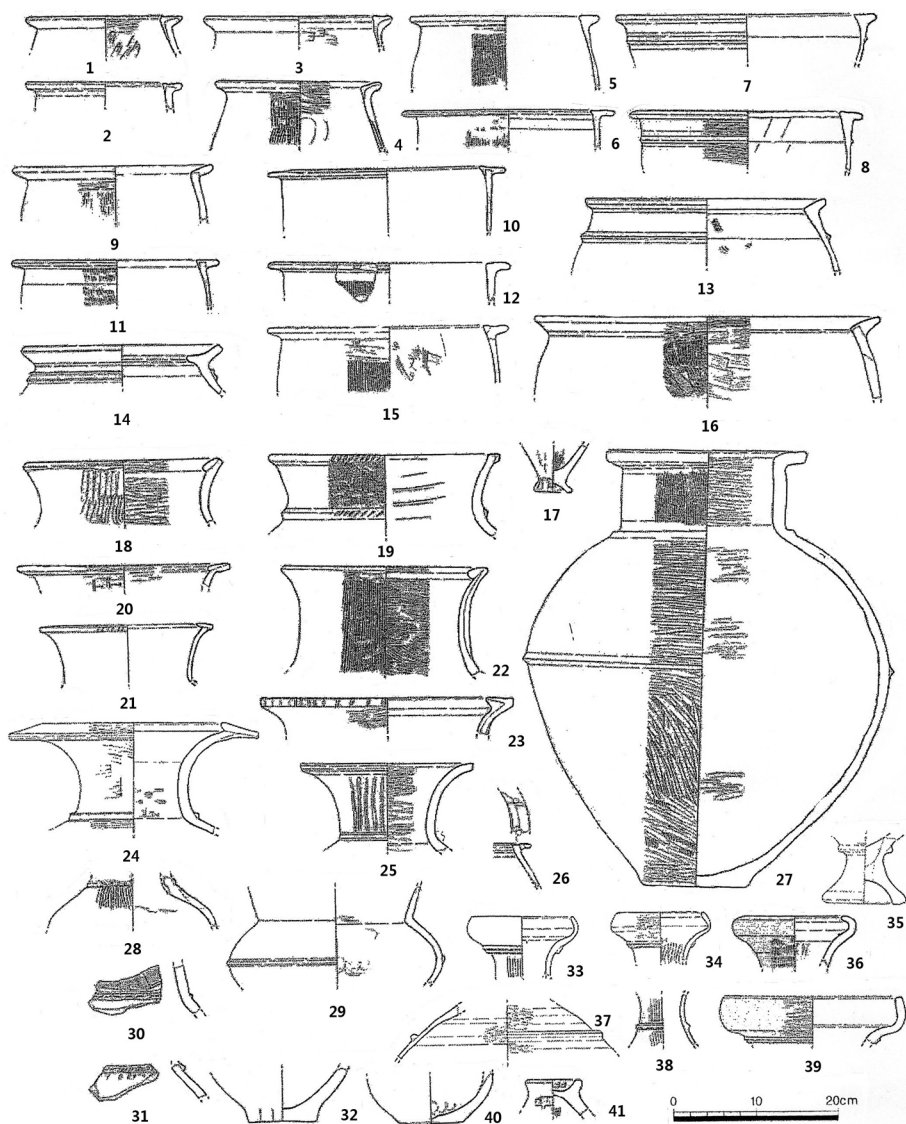
第3図 靑島遺跡出土弥生系土器 (1)



※1~5: 東亜大学校博物館 2004、8: 沈・中園 1997、9~21: 沈・金 2001 を基に作成

第4図 靑島遺跡出土弥生系土器 (2)

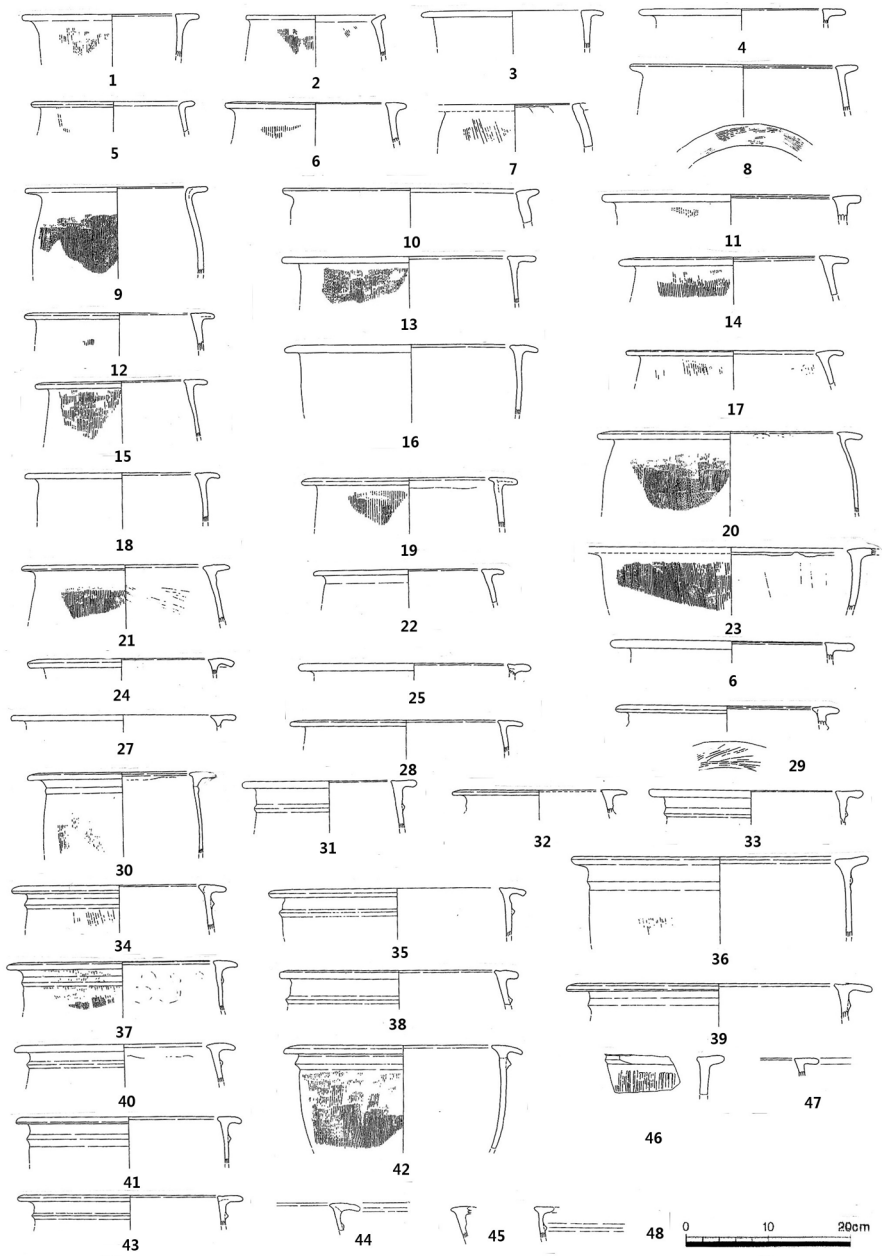
朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉



※武末 2006 を基に作成

第5図 靑島遺跡出土弥生系土器（3）

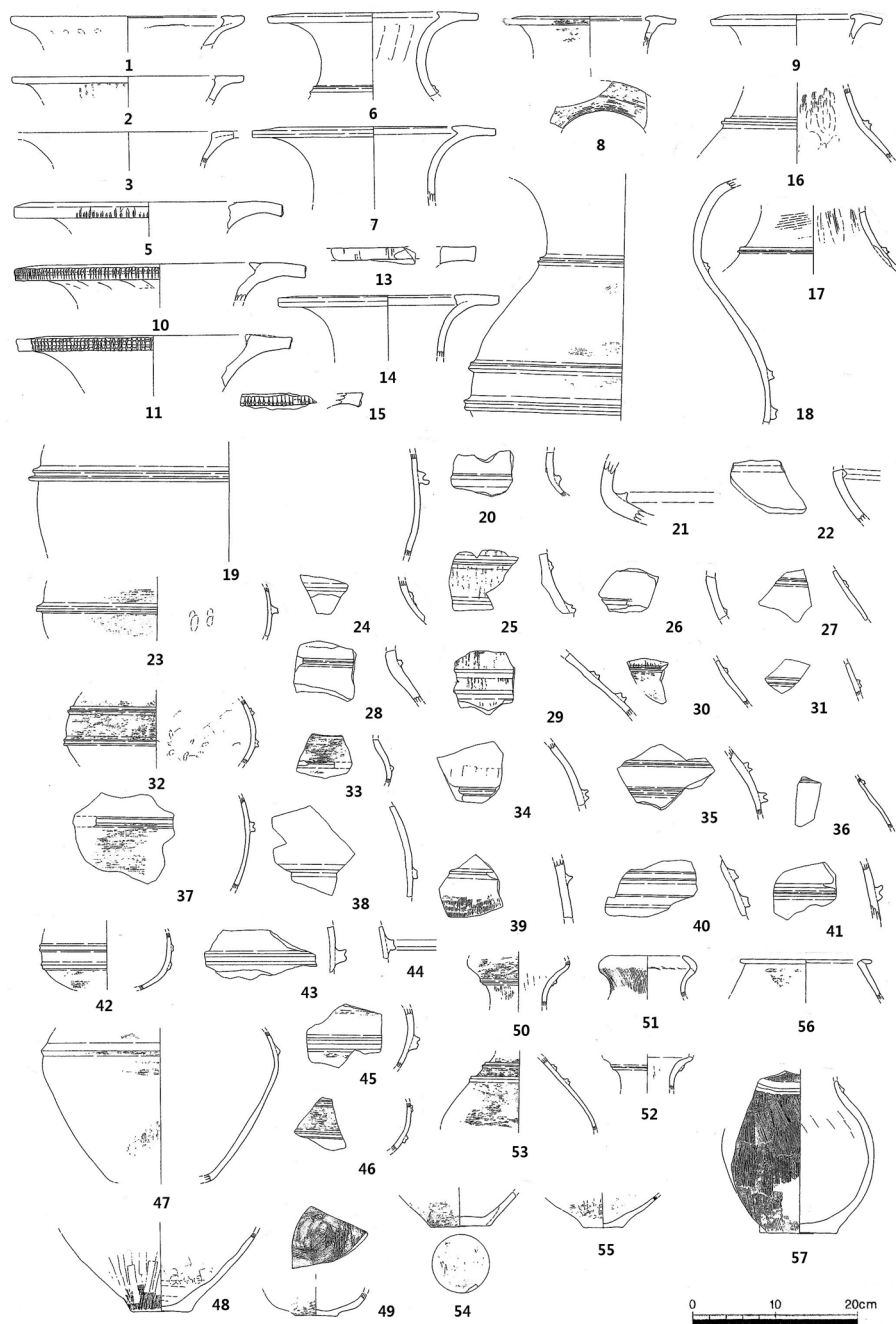
石丸 あゆみ



※李・石丸 2010 を基に作成

第6図 靉島遺跡出土弥生系土器（4）

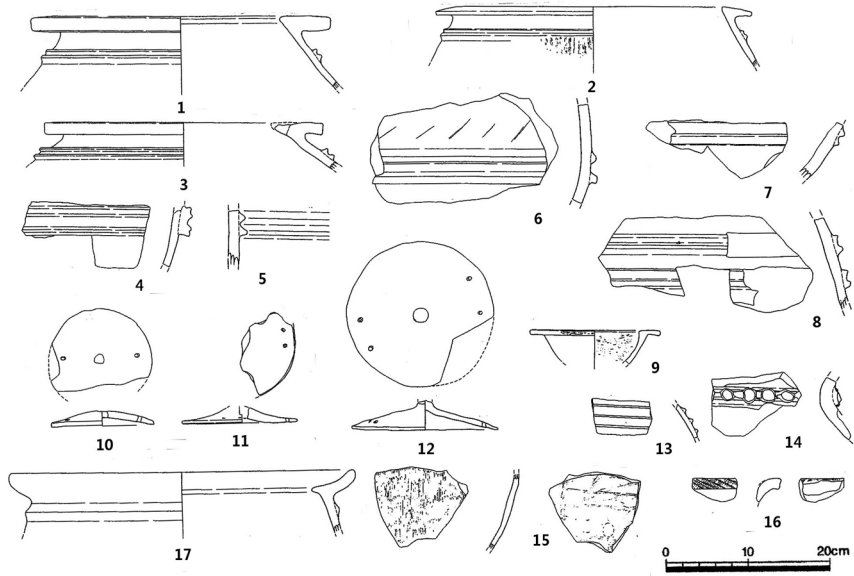
朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉



※李・石丸 2010 を基に作成

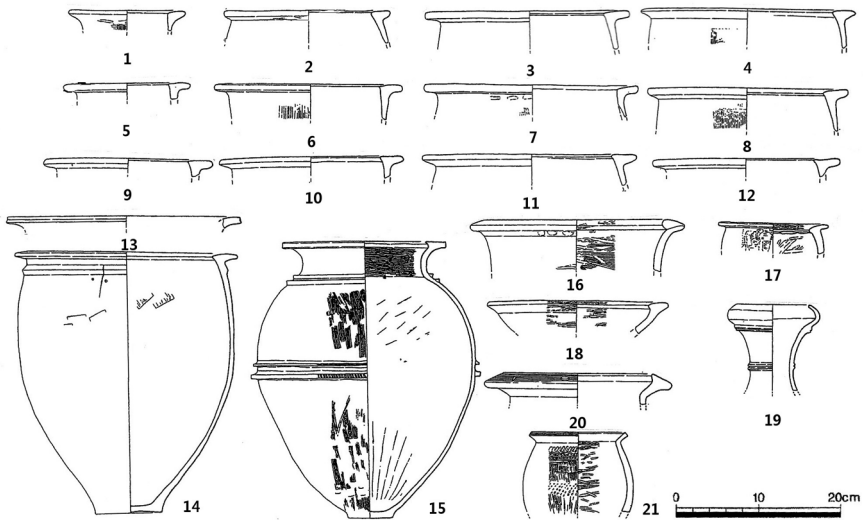
第7図 靑島遺跡出土弥生系土器（5）

石丸 あゆみ



※李・石丸 2010 を基に作成

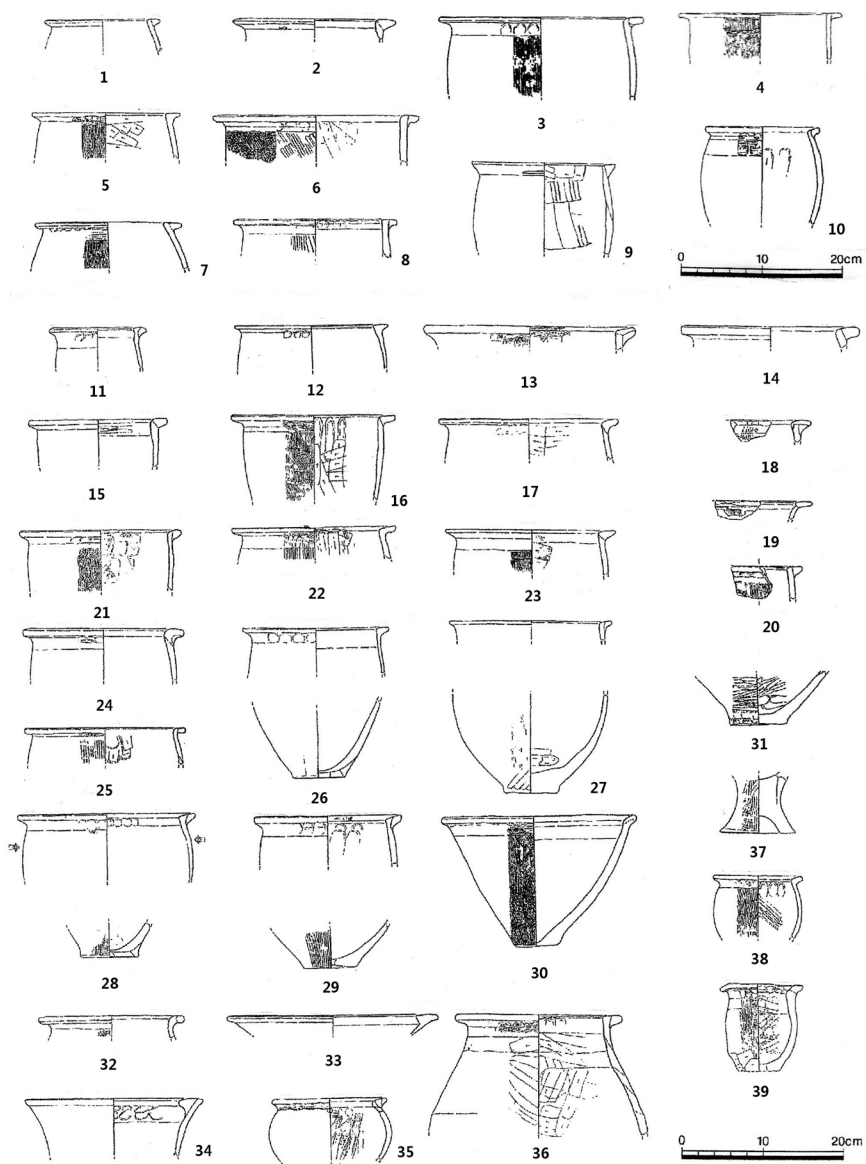
第8図 靉島遺跡出土弥生系土器 (6)



※釜山大学校博物館 2004 を基に作成

第9図 靉島遺跡出土弥生系土器 (7)

朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉

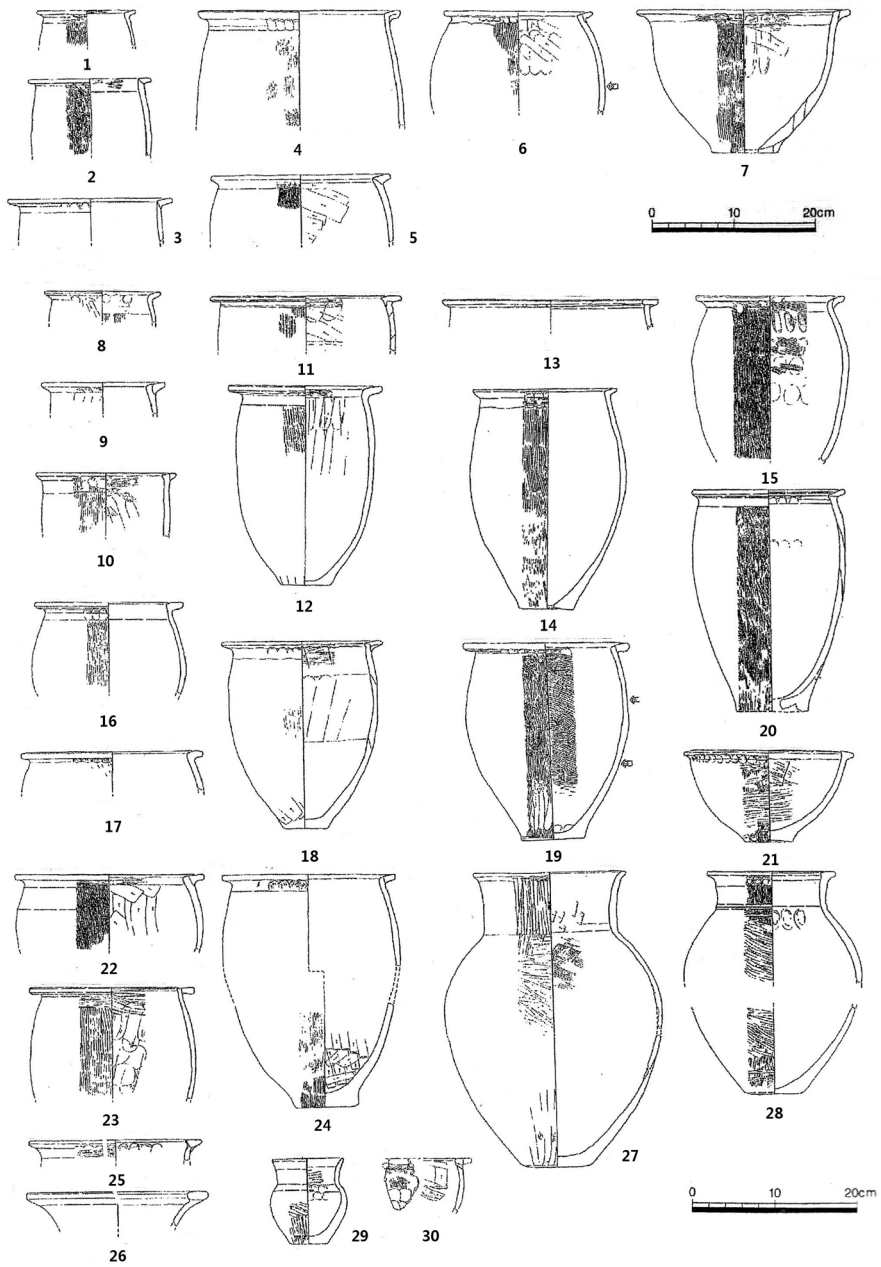


1 ~ 10 : 城ノ越式・A類、11 ~ 12 : 城ノ越式・B類

※武末 2010 を基に作成

第10図 亀山洞遺跡出土弥生系土器(1)

石丸 あゆみ

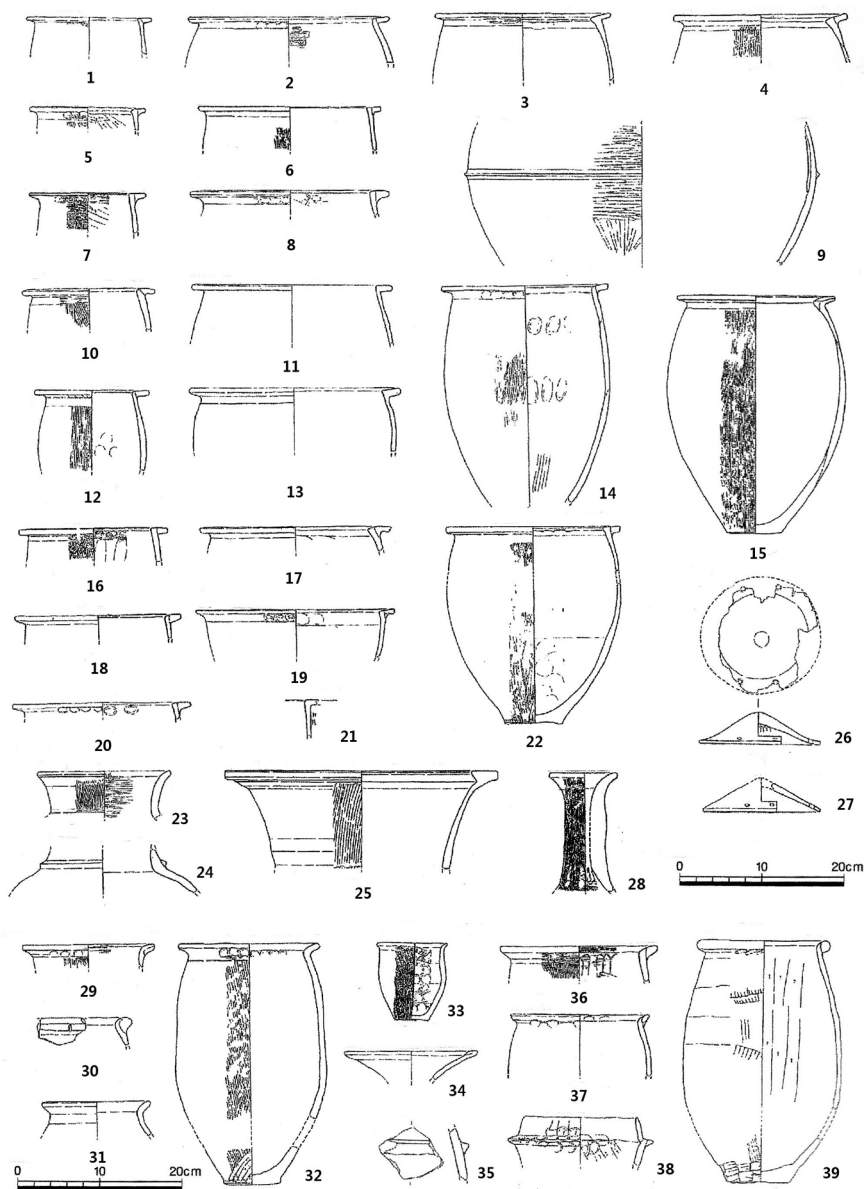


1 ~ 7 : 城ノ越~須玖 I 式・B 類、8 ~ 30 : 須玖 I 式・B 類

※武末 2010 を基に作成

第 11 図 亀山洞遺跡出土弥生系土器 (2)

朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉

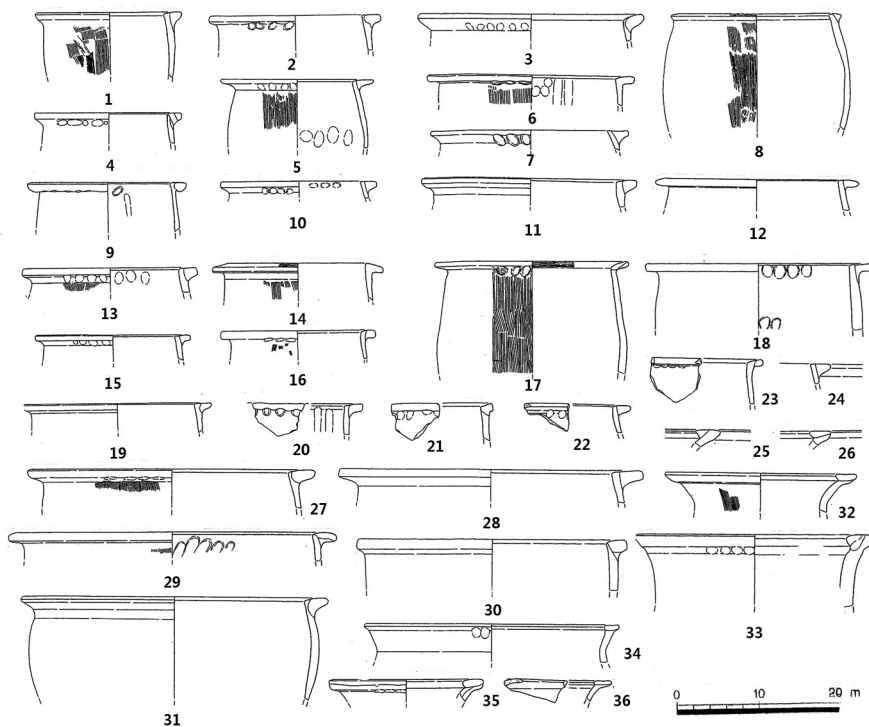


1 ~ 28 : 須玖 I 式・A 類、29 ~ 32 : 板付 II b・B 類、33 ~ 39 : 型式不明・B 類

※武末 2010 を基に作成

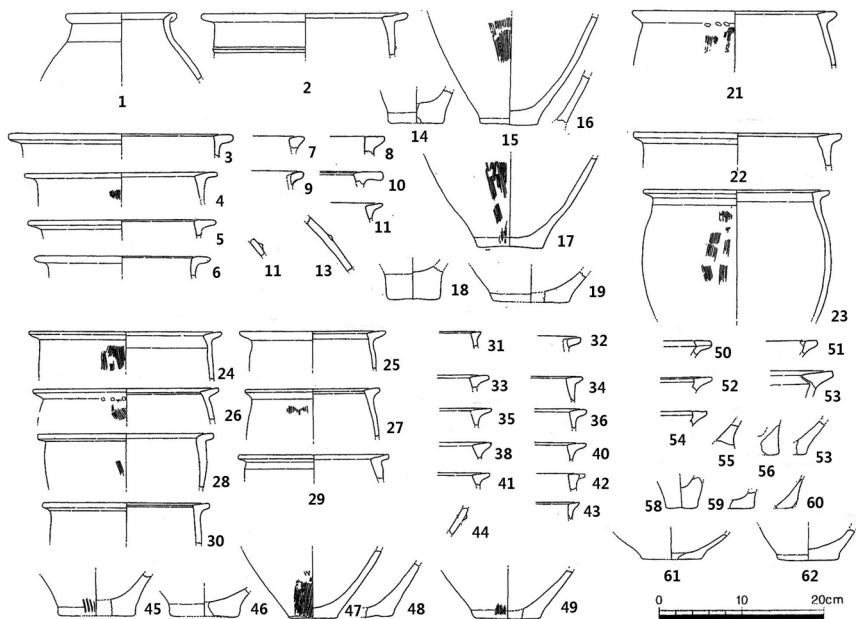
第 12 図 亀山洞遺跡出土弥生系土器 (3)

石丸 あゆみ



※釜慶大学校博物館 1998 を基に作成

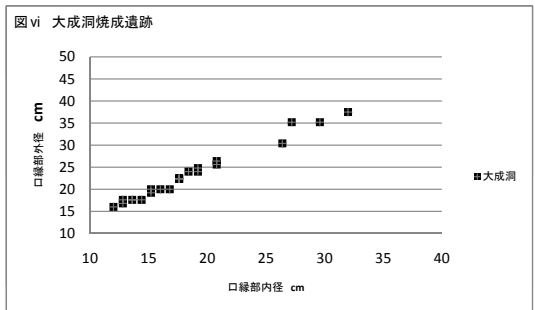
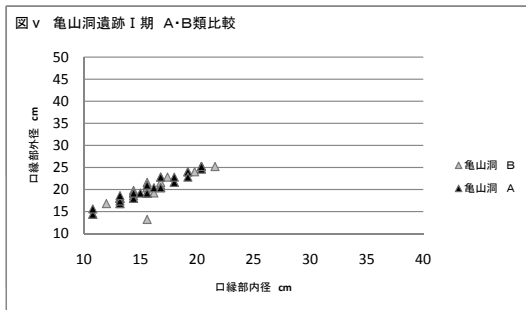
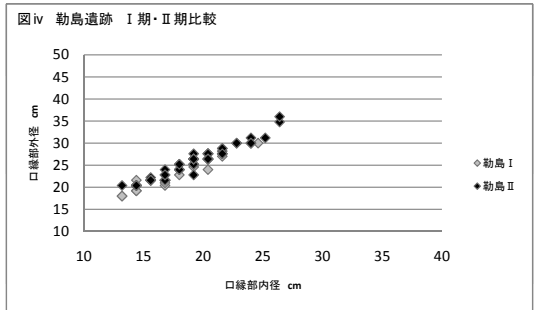
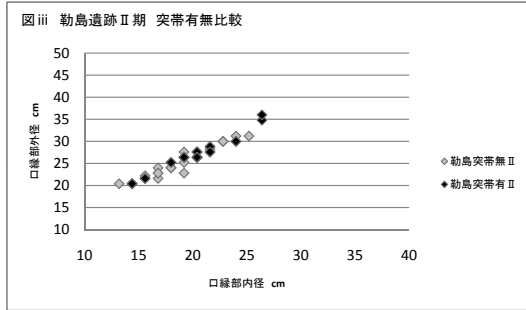
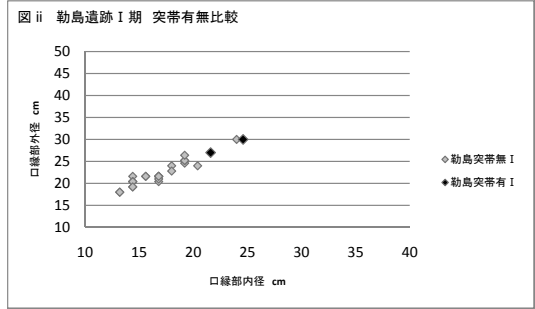
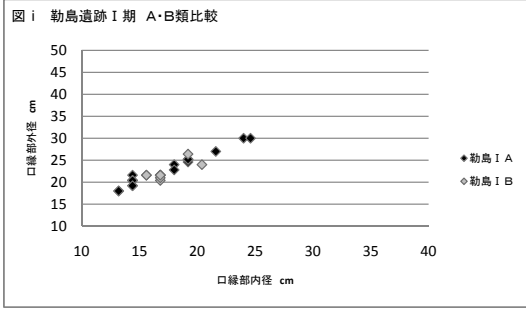
第 13 図 大成洞焼成遺跡出土弥生系土器

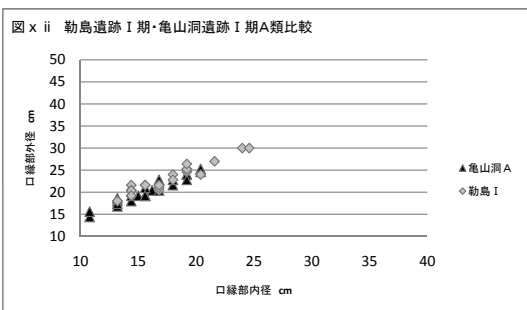
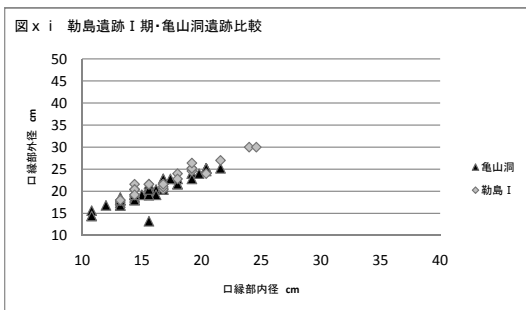
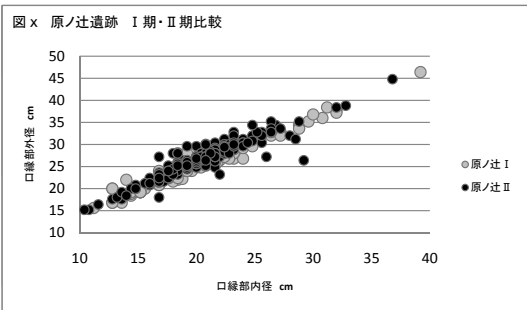
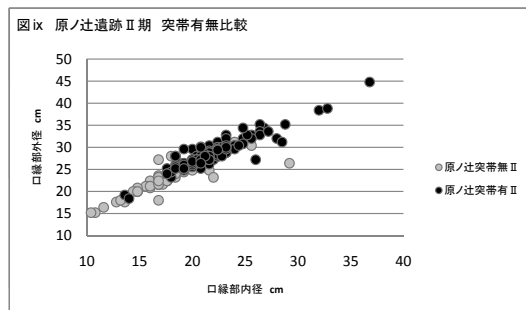
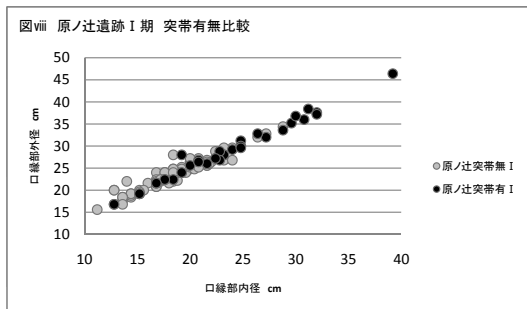
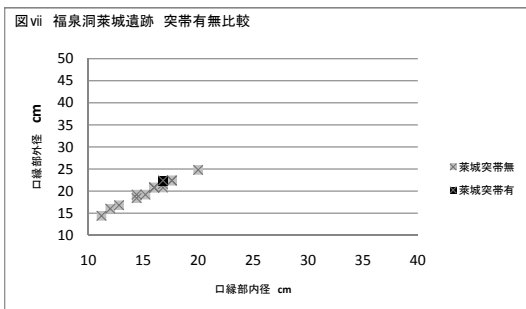


※釜山直轄市立博物館 1990 を基に作成

第 14 図 福泉洞萊城遺跡出土弥生系土器

朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉





朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉

図 x iii 勒島遺跡 I 期・大成洞焼成遺跡比較

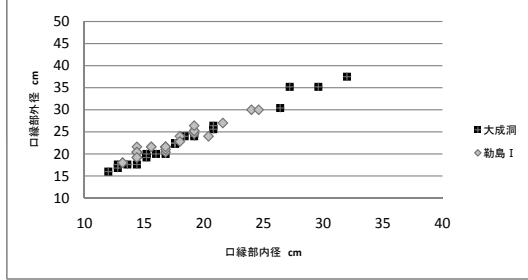


図 x iv 勒島遺跡 I 期・萊城遺跡比較

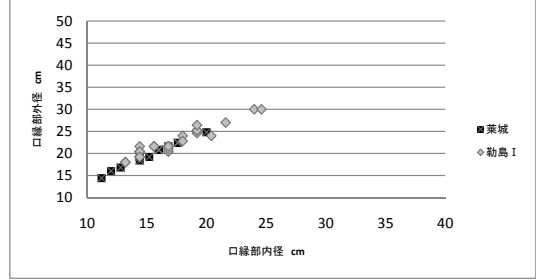


図 x v 龜山洞遺跡・大成洞焼成遺跡比較

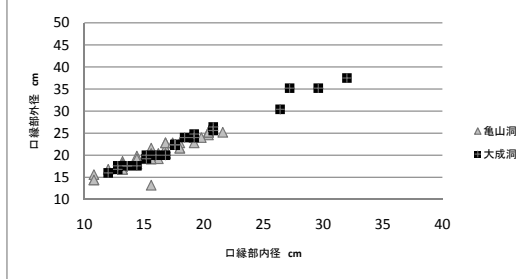


図 x vi 勒島遺跡 I 期・原ノ辻遺跡 I 期比較

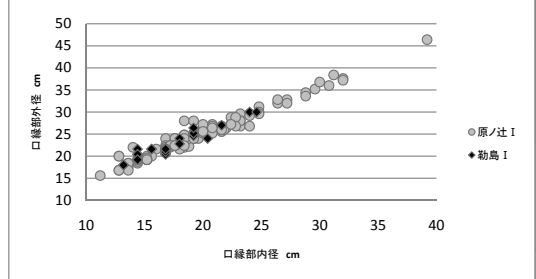


図 x vii 龜山洞遺跡・原ノ辻遺跡 I 期比較

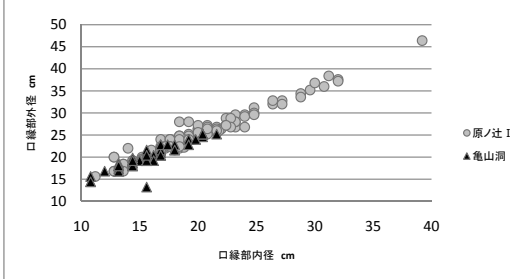


図 x viii 龜山洞遺跡A類・原ノ辻 I 期比較

